

アントニーの思ふ中

レオナルドとアントニーは幼いころからの友達で、二人は絵を描くことが大好きだった。二人とも、画家として活やくする夢を見ていた。

やがて、二人は有名な絵画の学校に入学した。大好きな絵を勉強するために一生けんめいに働いて学費をはらい、わずかに残ったお金を出し合って小さなアトリエを借りた。そのアトリエで夢中に絵をかいたり、将来の夢やおたがいの絵について熱心に語り合ったりした。アトリエでの時間は、二人にとって大切なかけがえのないものであった。

学校を卒業してすぐに、レオナルドに大きなチャンスがおとずれた。かれの応募した絵が、大きなコンクールで大賞を取ったのである。レオナルドは、真っ先にそのことをアントニーに伝えるとい、アントニーはとても喜んだ。

「レオナルド、すごいじゃないか。君は、ぼくの自まんの友達だよ。このチャンスを大切にするんだぞ。」

大賞をとったレオナルドは、またたく間に有名画家となった。かれの絵は高値で売れ、生活は一変した。いろいろな人たちとの付き合いが増えたかれは、いつしかアントニーと会うこともなくなっていた。

レオナルドの活やくを心から喜んでいたアントニーは、それでよいと思った。

十年後、レオナルドは有名なコンクールのしん査員となっていた。

「今年の絵は、どれもすばらしいですな。」

審査員たちは口ぐちにそう言い、応募された絵のレベルの高さに感心していた。多くの絵の中で、最終選考に二つの作品が残った。レオナルドは、この最終選考のしん査員を任されていた。どちらもすぐれた作品ではあったが、きれいな色づかいで独創性に富んだ絵に、レオナルドは心をひかれた。

（こんなにすばらしい絵は見たことがない。この絵を大賞にえらぼう。）

大賞にえらぶ絵を決めたうえで、今一度、もう一方の絵に目をやったレオナルドは、はっとした。絵のすみに小さく書かれていたので分かりづらかったが、よく見ると、それは見覚えのあるサインだった。

（アントニーの絵だー！）

なつかしいサインを目にして、レオナルドの心は大きく揺れた。会わなくなっても、アントニーのことをずっと気にかけていたレオナルド。かれには冷静なしん査はできなかった。すばらしいと思う絵を選ぶのか、それとも、友達のアントニーの絵をえらぶのか…。

迷いに迷ったすえ、レオナルドは心を決めてアントニーの絵に票を入れた。接戦であった最終選考で、レオナルドの票が明暗を分けた。アントニーの絵が大賞をとったのである。

アントニーの大賞を自分のことのように喜んだレオナルドは、その夜、応ば用紙からアントニーの連絡先を知り、興奮気味に電話をした。

「よくここが分かったね。君から電話をかけてくれるなんてうれしいな。」

アントニーは、なつかしい友達の声にとっても喜んだ。

「君の絵がコンクールで大賞をとったことを、一刻も早く伝えたくてね。」

「それは本当かい。しかし、なぜ君がそのことを知っているんだい？」

「実は、あのコンクールのしん査にたずさわっていたんだよ。あれは君の絵だと、サインを見て分かった。今回はすばらしい絵がたくさんあって、ぼくも迷ったよ。でも、友達の力になって本当によかった。」

その話しぶりから、アントニーには、しん査時のレオナルドの心の中が容易に想像できた。しばらくのちんもくの後、

「そうだったのか…。」

そう言うと、アントニーは力なく受話器を置いた。しばし、ぼつ然と立ちつくしたアントニー。かれの目から一筋のなみだがすうっと流れ落ちた。

電話がきれたあとにようやく、レオナルドはアントニーの気持ちに気が付いたのだった。

数日後の授賞式に、アントニーの姿はなかった。レオナルドは、かざられていた大賞の絵を複雑な気持ちで見つめていた。アントニーの絵の題名は「アトリエの思い出」だった。